

完全な喜び

松永 敦神父

10月4日はアッシジの聖フランシスコの記念日となっています。フランシスコは福音に従い、清貧を貫いた聖人です。裕福な織物商の家に生まれ、青年期は放蕩の限りを尽くしていたのですが、回心をします。そんなフランシスコがあるとき、兄弟レオに「完全な喜び」について語っています。

ある日、フランシスコは、聖マリア聖堂で、兄弟レオを呼んで言った。「兄弟レオよ、書きなさい」。レオは答えた。「ご覧下さい、用意は出来ています」。「書きなさい、何が完全な喜びであるかを。使者が来て、パリのすべての学者が兄弟会に入ったと言う。書きなさい、これは完全な喜びではないと。同時に、アルプスの向こうのすべての高位聖職者、大司教、および司祭が、また、フランスの王とイギリスの王が本会に入っても、書きなさい、ここにも完全な喜びはないと。また、私の兄弟たちが異教徒のもとに行き、彼らを皆、信仰に導いたとしても、また、私が神から大きい恵みをいただいて、病人を癒やし、数々の奇跡を行うとしても、私はあなたに言う。この全てのうちに完全な喜びはないと」。

「では、完全な喜びは何か。私がペルージャから帰り、深夜ここへ来る。しかも、冬の、泥だらけで、大そう寒い時期である。それで、つららが修道服の裾にこびりつき、私の両足を絶え間なく打つ。そのために、血が傷口から流れている。私は全身、泥と寒さと水に包まれ、門に着く、そして長い間、叩き叫んだ後に兄弟が来て尋ねる、『誰だ』私は答える。『兄弟フランシスコです』すると、彼は言う。『立ち去れ、今は来るのにふさわしい時刻ではない、入れることはできない』再び切願する私に彼は答える。『立ち去れ、お前は愚かで無学な者だ。確かにあなたは我々の所に来るべきではない、我々はお前を必要としていない』私は再び門の所に立って言う。『神への愛のために、今晚、私を受け入れて下さい』すると彼は答える。『だめだ、よそへ行って頼むがいい』。私はあなたに言う、もし私が忍耐し、とり乱さないなら、この中にこそ、完全な喜びがある」。

日々の小さなことにも腹を立てている私。完全な喜びにあずかることができるように、聖フランシスコに倣いたいと思います。